

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

特集1 みなとびあの学校対応 P.2~3

特集2 第10回むかしの暮らし展
移り変わるくらしと住まいの道具 P.4

常設展示室から 機雷と新潟港（コーナー「港の復興」） P.5

おすすめの一冊 「開港場・新潟からの報告
—イギリス外交官が伝えたこと—」 P.5

みなとびあ 研究notes ショー・ウィンドーの装飾 P.6

館長日記 的場遺跡の「和同開珎」 P.7

収蔵資料紹介 オオビラ P.7

博物館を支えるモノ・もの タッカー P.8



秋・石倉の屋根

【たいけんのひろばプログラム】楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・参加費・対象
10月27日(日) 13:00~16:00	どんぐりざんまい!	秋のおたのしみプログラムです。どんぐりでアクセサリやおもちゃを作ります。	申し込み不要・無料 材料がなくなり次第終了
11月2日(土) 14:00~15:00	むかしのあそび塾	新潟で昔から行われてきた遊びをしてみましょう。	申し込み不要・無料
11月10日(日) 14:00~15:30	レコードを聴いてみよう	レコードを聴いて、その仕組みを考えてみましょう。	申し込み不要・無料
11月30日(土) 14:00~15:30	みなとびあもめん部④	博物館資料を使い、糸紡ぎや機織りなど昔の手仕事を再現する試みです。	お問い合わせください

お申込みは、お名前・連絡先電話番号を記載の上、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっていますので、詳細は当館までお問い合わせください。

① 11月24日(日) 14:00~16:00	大人向けモノ作り体験 「わらぞうり作り」 (全2回)	わら細工の名人、黒埴民具保存会の方々から、わらぞうり作りを学びます。	11月14日(木)必着・無料 両日参加できる16歳以上の方9名
② 12月1日(日) 14:00~16:00			
*2回連続のたいけんプログラムです			

参加ご希望の方は、電子メールまたは往復はがきに氏名・住所・連絡先電話番号を明記のうえ、当館「わらぞうり係」までお申し込みください。

現在開催中 企画展 第10回むかしのくらし展 「移り変わるくらしと住まいの道具」

くらしの舞台である住まいとその道具の展示を通して、道具と生活様式の変化をたどり、それぞれの特色を紹介します。

【会期】2013年9月14日(土)~11月24日(日)

【観覧料】無料 ※常設展の観覧は有料です。

【休館日】10/28(月)
11/5(火)・11(月)・18(月)

【関連イベント】★たいけんプログラム

◆レコードを聴いてみよう

日時：11月10日(日) 14:00~15:30

内容：レコードを聴いて、その仕組みを考えてみましょう。

申し込み：不要。当日企画展示室へお越しください。

次回 企画展 活動展示「博物館行き」

資料の展示を通して、博物館の機能のひとつである「収集活動」を紹介します。

【会期】2013年12月7日(土)~2014年1月26日(日) 【観覧料】無料 ※常設展の観覧は有料です。

【休館日】12/9(月)・16(月)・24(火)・28(土)・29(日)・30(月)・31(火) 1/1(水)・2(木)・3(金)・6(月)・14(火)・20(月)

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

時間：13:30~15:00

会場：本館2階セミナー室

申込み：不要。当日受付、定員50人程度

資料代：100円(資料のない回は無料)

■ 11月の講座：11月24日(日)
「新潟奉行所草創期の司法Ⅱ」
講師：若崎 敦朗

■ 12月の講座：12月22日(日)
「新潟の対子ども教育」
講師：早川 飛鳥

■ 1月の講座：1月26日(日)
「新潟のお祭りについて」
講師：渡邊 久美子

■ 2月の講座：2月23日(日)
「村の鍛冶屋」
講師：森 行人

博物館を支えるモノ・もの タッカー

一見すると、大きなホッチキスのような道具、それがタッカーです。ホッチキスのようにステープル(針)を打ち付けて固定する道具ですが、タッカーのステープルは布や薄い板、壁に針を通すことも可能です。日曜大工の道具としてホームセンターで手に入りますが、展示の際に活躍します。資料やパネルを吊り下げたワイヤーを固定したり、造作物を固定したり、隠れた部分で止めたいところを止めてくれます。ホッチキスのように針を受ける部分がないので、使う時は注意が必要です。



編集後記 「帆樫成林」第30号はいかがでしたか。9月に入ってから、たくさんの小学生が社会科見学・総合学習でみなとびあを訪れています。今回の特集では、見学を含めた学校対応について触れました。博物館と学校との関わりを、少しでも知っていただければと思います。また、企画展示室では10回目となったむかしのくらし展を開催しております。学校の授業に合わせた企画展ではありますが、ご家族で楽しめる展示となっております。先日「懐かしかった、新婚当時に思い出したわ」とのお声をいただきました。みなさまも、どうぞ足をお運びください。お待ちしております。(早川)

お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
TEL:025-225-6111 fax:025-225-6130
E-MAIL:museum@nchm.jp
休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9:30~17:00



みなとびあめの学校対応

森 行人

学校対応は、新潟市歴史博物館の教育普及事業の大きな柱です。小中学校から高校・大学まで、それぞれの利用目的に合わせた様々な事業を行っています。

対応実績と方法

小学校の利用では、まず社会科の学習での利用が挙げられます。四年生では昔の道具、地域の開発を学ぶ場として、六年生では社会科歴史学習の導入としての利用があります。また、各学年の遠足、校外学習の場としての利用もあります。

中学校の利用では、グループ学習の一環として、各グループのテーマに関する疑問に対して、該当する常設展示の内容を紹介したり、生徒の質問への回答や参考資料の提供を行ったりしています。また、職場体験の受入れも行っています。これは各スタッフの指導の下で体験プログラムのサポート、資料整理に関わる作業、展示等の受付などの館務を数日間にわたって経験します。

小中学校は市内・近隣自治体の多くの学校から申し込みがあり、近年は小中合わせて年間約一四〇校、約七〇〇〇人の児童・生徒が来館しています。

この他、高校や大学に対してもそれ

ぞれ校外学習や講義の趣旨に応じた展示・施設の解説を行うほか、大学では学芸員資格を取得するための博物館実習の受け入れや、県内に立地する大学と連携した講座に学芸員の派遣を行っています。

当館では、こうした様々な学校利用への対応を教育普及事業の柱と位置づけ、二〇〇四年の開館以来様々な事業を行っています。このうち、ここでは最も多い学校団体の見学利用、中でも学校利用を目的として位置付けている企画展「むかしのくらし展」について述べ、最後に資料の活用を重視した出前授業を紹介します。

団体利用（見学）

学校団体の利用に際しては、まず担当の先生に事前の打ち合わせをお願いします。

授業の目的や観覧を希望する展示施設、授業を通じて生徒たちが調べる具体的な内容、昼食や集合の場所など学校側の要望の聞き取りを行い、それに応じて展示ガイドやワークシート（WS）等、当館で用意している学校対応のプランを紹介しながら、当日の見学内容と具体的な流れを相談します。

学校団体への対応を主に担っているのは当館ボランティアのみなさん

です。当館ボランティアは常設・敷地・体験の三つのグループで活動しており、学校対応に際してはそれぞれ常設展示や敷地内の旧新潟税関庁

舎・旧第四銀行住吉町支店、当時の石段の復元施設などのガイド、また体験の広場での民具の体験や説明などを行っています。

また、常設展示と体験の広場、後述するむかしのくらし展ではクイズ形式で楽しみながら展示のポイントを観覧することができ、WSを用意しています。学校で事前に印刷・配布して観覧の教材に利用してもらったり、当館ボランティアが一緒に展示を観覧しながらポイント解説を行ったりします。ボランティアのみなさんとは、学校対応のための勉強会も行っています。

学校団体の利用に際して重要になるのが、当日の流れの打合せです。当館の展示室は、ストーリーを重視し、文字や写真・図を使用して説明するスペースを確保するために展示壁を多く設けており、通路状の空間が入り組んだ配置になっています。そのため、一〇〇人以上で来館する団体の場合、全員が同時に展示を観覧することはで



学校対応の一例（体験）

きません。特にガイドを行う場合は、展示を見ながら説明を聞くことができるように小人数のグループに分ける必要があります。

担当の先生と相談しながら、各グループが常設展示と企画展示、体験の広場、敷地の見学などを十分に観覧して回ることもできるように当日のフローを打合せます。秋から冬にかけては学校団体の利用が集中するため、一日に数校の利用が重なることも珍しくありません。複数の学校団体がぶつからないように、日程の変更や午前・午後に分かれるように打ち合わせます。利用が多い日は、一時間単位で観覧時間を調整することもあります。

事前の打ち合わせにより、授業の目的を踏まえて利用の効果をより高めることができます。また、複数校の利用が重なってもスケジュールが滞らないようにスムーズに利用していただけます。他にも、市内の小中学校には展示観覧料の減免も行っており、事前打合せの際に手続きをしていただくことができます。

むかしのくらし展

当館では、毎年秋から冬にかけて

「むかしのくらし展」を開催しています。むかしのくらし展は、小学生を主な対象とする展示で、むかしの生活道具など民具を中心に展示をする企画展です。小学校三年生の社会科学習は「昔のくらしとまちづくり」という単元で、地域のむかしのくらしで使われた道具を調べます。むかしのくらし展は、この学習に博物館を活用してもらったために企画した展覧会です。

同様の趣旨の展覧会は各地の歴史系博物館・資料館でも開催されていますが、当館のむかしのくらし展は毎年テーマを変えている点でユニークです。テーマを変えることで、毎回興味をもてますし、また地域の生活文化の調査研究に資することにもなります。むかしのくらし展は今年度の「移り変わるくらしと住まいの道具」展で十回目となりますが、近年では来館者数が一万人を超え、学校関係者だけでなく一般の利用者にも展覧会のシリーズとして定着しています。

また、むかしのくらし展では、一部市外を含む市内のターゲットエリアの小中学校を通じて、展覧会開催をお知らせする「ファミリー割引チラシ」を全生徒に配布しています。このチラシは、学校の利用喚起はもちろん、学校での利用後の休日にぜひ家族で来館してもらいたいと考案したものです。このチラシをご持参頂くと、ご家族全員が団体割引となります。くらし展そのものは無料ですし、土日休日は小中学生の観覧は無料減免になりますが、さらに

ファミリー割引を設けることで、家族連れで常設展示も含めてご観覧頂きたいと考えております。

出前授業

展示は多人数に向けて一定の情報を伝えるのに適した方法ですが、資料が内包している豊かな情報と向き合い、気付き、掘り下げていくという経験は、個人的・内的なものです。その意味では、民具は使い方を言葉で説明するのは難しく、現代の私たちにはなじみの薄い資料も多いため、展示から情報を読み取るのは意外に難しいのです。

したがって、子どもたちが現代の生活とは異なる「昔のくらし」を民具を通じて知ろうとしたとき、資料と子どもたちとの間を取り持つサポートが必要で、火鉢を例にとると、現在も使われる炭火を燃料として暖まるという事自体は理解できても、炭火のおこし方や、暖房の使用後に火種を取っておくこと、炭を使い回したり消し壺に入れて消火・保管したりすることを、現代の私たちが想像することは困難です。当時はこうした行為のひとつひとつが暮らしに欠かせない技術であり、そこにはくらしの背景にある考え方が端的に表れています。このような、言葉だけでは伝えきれないことに気付くためには、実際に資料を前にして五感を働かせて、得た情報を他者と言葉で交わしながら理解を深める、個別的・双方向的経験が重要になります。

学校対応では、こうした博物館の実物資料を使った、博物館ならではの深い資料活用をできるとよいのですが、通常の団体利用では展示を見るだけ、体験の広場でも多くは短い来館時間の中でただ触れるだけで終わってしまいます。また、実際に使われていた生活道具とはいえ、資料として取り扱う配慮が必要で、多人数が触れたり使ったりすれば損壊するリスクがあります。

そこで当館では、資料の「貸出」ではなく、資料の取り扱いを学芸員が指導しながら、対象人数を絞って深い資料活用を実現する「出前授業」を行っています。

出前授業は、現在年に一、二校を対象として行っています。二〇二二年度は、新潟大学教育学部附属小学校の三年生一クラスを対象とし、社会科学習の一環として行いました。内容は暖房具をテーマとし、担当教諭の作成した社会科学習指導案に沿って数度の事前打ち合わせを行いました。指導案は「進め！昔の暮らし調査隊—新潟の冬の道具と暮らし」と題するものでした。

新潟の冬に用いる暖房具とその背景にあるものの変化に気づかせ、昔の人々がどのような知恵と工夫を用いて対応してきたか、それがどのようなプロセスを経て現代の私たちの暮らしにつながってきたのかを考えさせることを目的としました。担当教諭からは、民具を介して言葉による提示だけでは気付かない疑問・発見につながるような働

きかけを学芸員からしてほしいとの要望があり、当館からは指導案での民具の位置付けや実際の民具の活用方法について助言や提案をして、授業の進め方を相談しました。

授業は、まず各自がそれぞれの家庭での暖房器具について調べた上で、当館で昭和四十年代の暖房具、ガス・電気ストーブ、行火、置きこたつなど道具を見て、仕組みや使い方を観察しました。

そして、教室でこれらの観察結果や、バーベキューコンロの炭火なども踏まえて、昭和十年代にはどのような暖房具を使ったと思うか、児童にはそれぞれの考えを発表してもらいました。そうして現代とは異なる生活と工夫という認識を持った上で、昭和十年代の暖房具の観察と使用体験を行ったところ、冒頭に述べた暮らしの技術、その背景にある考え方に気づく声が上がりました。ここまでのプロセスを経た成果といえます。なお、出前授業は新潟大学教育学部附属新潟小学校初等教育研究会の一環として、公開授業の形式で行われました。

今と昔の暮らしの違いを知ることには、今の私たちの暮らしの成り立ちを知ると共に、今を相対化し比べたり異文化について理解したりするきっかけになると考えます。民具を用いた出前授業の深い資料活用を通じて、そうした気付きにつながる手掛かりを得られるように努めています。

（もり ゆきひと 学芸員）

第十回むかしのくらし展 移り変わるくらしと住まいの道具

田嶋 悠佑

新潟市歴史博物館では、毎年秋に小学校三、四年生の社会科の授業に合わせ「むかしのくらし展」を開催しています。十回目となる今回は、人々の生活の基本となる「衣・食・住」の中でこれまで取り上げてこなかった「住」に関する道具、すなわち「住まいの道具」に焦点を当てた展示を行いました。

住まいの道具には暖房具をはじめ、照明具や寝具、収納具などがあります。わたしたちがふだん生活する中でこたつや電灯などの道具は欠かせないものとなっていますが、こうした道具たちも今日に至るまで数多く変化しています。展示では住まいの道具の移り変わりを、明治時代から一五〇年間に大きく変わったわたしたちの生活とともに概観しています。

「明治から大正、昭和戦前の住まいの道具」

企画展示は大きく明治、昭和戦前の住まいの道具、住まいの移り変わりの様子、戦後の住まいの道具という三つのテーマに分けて展示しています。まず、明治、昭和戦前の住まいの道具をご紹介します。明治時代になると外国から新しい道具がつぎつぎと日本にもたら

されましたが、江戸時代以来の道具も引き続き使われていました。大正時代から昭和初期には娯楽や通信に関する道具が次第に浸透して、住まいに衣食住以外の道具が増えってきました。また戦争が始まると新たに物を買うのが難しくなり、代用品が使われるようになってきました。展示では江戸から明治に使われた箱枕やガンドウ、娯楽や通信の道具として普及した蓄音機や電話機、戦時中の代用品である陶器製湯たんぽや布バケツなど各時代の特徴を示す道具を選んで展示しています。

また「あかりはどう移り変わったか？」のコーナーでは照明具の移り変わりに注目し、照明の明るさを変えて明治、昭和戦前の照明具であるカンテラ、ガスランプ、電灯のそれぞれで部屋の中がどう見えるかを展示しています。ほかにも当時の新潟のくらしをより詳しく知ってもらうために新潟における電気・ガス・水道の歴史を解説したコーナーや当時の子どもたちの生活を伝える「遊びの道具」のコーナーを設けています。

「昭和三十五年の茶の間」

展示の中盤では第二のテーマとして住まいの移り変わりの様子を取り上

げています。このコーナーの中心には昭和三五（一九六〇）年ごろの茶の間を再現しました。この展示で注目していたいただきたいのが白黒テレビの存在です。新潟では昭和三十三（一九五七）年十二月一日にNHKの放送が開始され、このころはテレビが新たな娯楽として住まいの道具の一つに取り入れられていく時代でした。一方で、部屋の中には火鉢やチグラ、ついたてなど戦前から使われている道具もまだまだ多く見られ、新旧が入り混じる昭和三十五年という時代を実感できることと思います。

この茶の間のほかに「豊かになるくらし」のコーナーでは電気炊飯器や電気洗濯機、電気冷蔵庫と、これらと関わるかまど、洗濯板、水冷蔵庫などの道具を並べて展示しています。また新潟における明治、昭和戦後の代表的な住宅を取り上げ、その変化を知ることができるコーナーもあります。

「昭和戦後の住まいの道具」

第三のテーマとしては、昭和戦後の住まいの道具を取り上げご紹介していきます。昭和戦後の、特に高度経済成長期以降は日本の社会が立ち直り、経済

的に大きく発展した時代です。高度経済成長期には電化製品が広く使われるようになって、住まいの様子が大きく変わります。またテールといすや、集合住宅向けの道具など新しい生活スタイルに合わせた道具が使われるようになる時期でもあります。展示ではテール・いすの生活に合わせて大きさが変わった扇風機や集合住宅の生活に適合して人気を博した掃除機など、わたしたちの良く知っている道具を見ることが出来ます。

今回の展示では、こうした明治から昭和戦後の住まいの道具が展示されています。明治から昭和戦前の道具は映画などに登場するものも多くあります。また戦後の道具は、ある程度年齢を重ねた方なら使った記憶があるのではないでしょうか。

小学生に向けた展示内容ではありませんが、年代を問わず楽しめる展示となっております。展示を見ながら「あの映画で見た」といったお話を花をさかせたり、昔を懐かしんだりしていただければ幸いです。ぜひご家族やご友人とご一緒にご覧ください。

（たじま ゆうすけ 学芸員）

おすすめの1冊

開港場・新潟からの報告

—イギリス外交官が伝えたこと—

新潟港が開港したのは、一八六九年一月一日のことでした。では、開港直後の新潟はどのような様子だったのでしょうか。

本書はイギリス外交官の年次報告の和訳と、報告に関する考察の二部構成となっています。年次報告は外交官が本国の議会へ報告したもので、開港直後の一八六九年から一八七九年までの十年分を収録しています。報告書を読むと、新潟港の水深の浅さが開港後も大きな問題であったことがわかります。一方で、他地域との関わりから、水深の問題さえ解決されれば新潟港が他の日本海側の港よりも有用であると考えられていたことも分かります。報告書の大半は新潟港に関することがらですが、病院や監獄といった施設や、村松や新津といった新潟周辺地域の産業についても述べられています。

開港したばかりの新潟を、外国人はどう考えていたのか。また、その様子はどのように海外へ伝えられていったのか。報告書からはその一端がつかえます。

（早川飛鳥 学芸員）



青柳正俊
考古堂出版
2013年

常設展示室から

機雷と新潟港 (コーナー「港の復興」)



こうした機雷の被害を受けた船は貨物船だけではなくありました。6月7日午前6時30分頃、松浜港に帰港途中のイワシ漁船が阿賀野川河口付近で触雷しました。

当時、食糧不足がつづく日本にとって漁船が水揚げする魚類は貴重なタンパク源でした。そのため機雷投下後も出港した漁船があったといえます。

新潟港の機雷による被害は、貨物・貨客・艦艇・曳船・油槽・舢舨・浚渫・引揚等40隻以上の船舶の触雷、現在分かっている死亡者は91名ですが、いまだその全容は分かりません。こうした機雷による港の「封鎖」、そして触雷によって沈没・座礁した船は、船舶の航行を妨げ、さらに浚渫船が機能しなくなったことにより、河口は土砂が溜まり、浅くなっていきました。機雷は新潟港の「港」としての機能を奪いました。新潟港の掃海が終わったとされたのは、戦後の昭和27（1952）年1月15日のことでしたが、その後も触雷による被害がありました。

このコーナー「港の復興」では、機雷除去をはじめとした戦後の新潟港復興のようすを紹介しています。

安宅 俊介（あたか しゅんすけ 学芸員）

※参考文献：『新潟歴史双書 2 戦場としての新潟』1998
『新潟市史 通史編 4 近代（下）』1997

昭和20（1945）年5月14日、午前0時20分頃、アメリカ軍の爆撃機が新潟県下に侵入しました。4機のB29による夜間空襲でした。このとき新潟港に、43の機雷が投下されました。当時、アメリカ軍は大都市爆撃と並行して、重要港湾地帯に機雷投下をおこなっていました。これは「飢餓作戦」とよばれ、原材料・食糧輸入等をはじめとする物資の海上輸送の阻止を目的としていました。この日を境に、以降12回にわたって新潟港へ機雷投下がおこなわれることとなります。判明しているだけで、その数は781におよび、港内のみならず港への侵入を遮断するように港外へも投下されました。種別でみると、艦艇の音響に感応するタイプが200、磁気に感応するタイプが492、複合（磁気・水圧複合）タイプが89でした（『Mines against Japan』）。新潟港一帯は瞬く間に機雷原となりました。

これによって新潟港に出入りする数多の船舶が触雷して損害を受けました。5月27日午後6時58分、1623トンの銑鉄を満載していた日本郵船株式会社所有の「貴船丸」が、新潟港灯台北1400メートル地点に差し掛かったとき、左舷付近の機雷が爆発したことによって船体が破損しました。穴のあいた船体に海水が流入し、懸命の排水作業の甲斐もなく28日午前0時頃には上部甲板を海水が洗うようになりました。いそぎ積荷の銑鉄は陸揚げされましたが、6月4日「貴船丸」は曳航されて港内に向かう際、新潟港灯台東550メートル地点で再び触雷。船は中央部分から折れて船首、艦橋を水面に留めて沈みました。

シヨール・ウインドーの装飾

木村 一貫

高島屋や三越、白木屋などの百貨店が、明治後半に相次いで「シヨール・ウインドー」を導入しました。それまで「座売り」を基本にしてきた老舗や小規模店舗もこれに倣い、地方都市でも設置する店が増えていきました。やがて、陳列や装飾の技を競うコンクールも各地で開かれるようになります。

新潟市では、大正五(一九一六)年六月に週刊新聞「新潟公友」が、「市内商店頭装飾投票募集」を行いました。市内の商店から読者が優れた店頭意匠を選ぶ一種の人気投票で、これに顧問として関わったのが、県物産陳列館館長、長谷川銅之允(しのぶのり)でした。

長谷川は同年八月にも講習会の演壇に立ち、三日間にわたって商店経営者たちに「店頭装飾法」を講じました。内容はきわめて実践的なものでした。たとえば、店の間口に対してシヨール・ウインドーは左右どちらの位置がよいのか、品物を心地よく並べるには法則があるのか、昼と夜とで飾りの印象は違うのかなど、視覚の原理を応用した陳列の方法論を述べたのでした。

特に長谷川が強調したのは、店頭装飾の「目的」でした。シヨール・ウインドーとは、通行人をひきつけ、立ち止まらせ、店に入らせて品物を買わせる仕組みである。綺麗であったり奇抜であったりするだけでは見世物にすぎず、購買欲をそそるよう設計されな

ければならない、と説いたのです。講習会の翌年、全国特産品博覧会の開催に合わせて「新潟市店頭装飾競技会」が実施されました。本町通、横七番町、古町通などの六二店舗が参加して、シヨール・ウインドーや看板、照明などの意匠を競ったのです。中でも「須賀田写真機店」の陳列には講習会の成果がよく現れています(図一)。余計な装飾を省き、写真機そのものを効果的に配して、客の目が水平方向に移るように仕向けられています。「あなたは写真機をお持ちですか」と書かれた挑発的な背景画もあり、まさに模範的な店頭プロモーションでした。

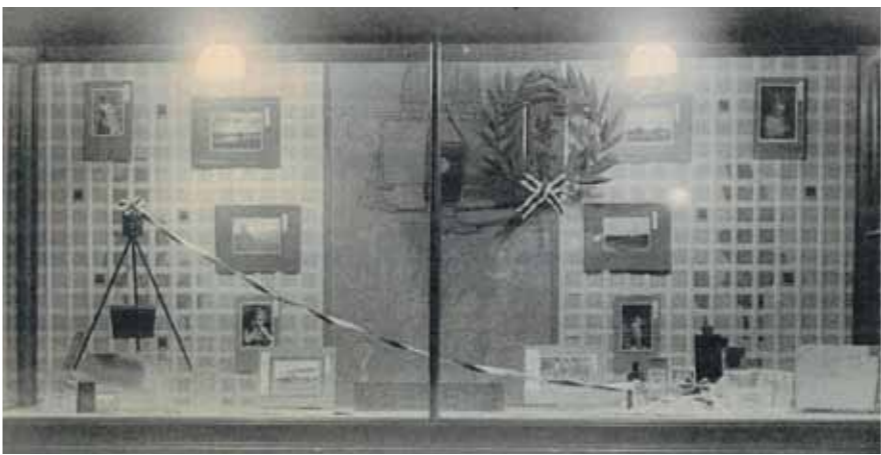
しかしながら、審査長だった長谷川は、総じて「凝り過ぎ」あるいは「幼稚」な意匠が多く、「趣旨が徹底せぬを遺憾」と評しました。装飾に没頭し、販売促進という本来の目的が置き去りにされたということでしょう。

こうした傾向は、食料品店の「桃屋」に特徴的に見られます(図二)。店主が手間暇をかけてつくったとされる「象の置物」が目を引きますが、肝心の商品(洋酒)との関係性が希薄で、唐突な印象を与えます。不衛生な動物は食品の宣伝に馴染まないのではないか、なども指摘されました。

当時、「デザイン」という言葉はまだ一般に使われていませんでした。デザインは、生活に機能させることを含

む概念です。つまり長谷川が講じたシヨール・ウインドーの考え方は、今日私たちが知っている商業デザインの基礎につながっていたのですが、つい飾り付けの見事さを競ってしまつた俄(はな)芸術家たちには、その機能性にまで配慮す

図一 須賀田写真機店の装飾



るゆとりがなかったのでしょう。

大正時代半ばは、農商務省を中心に商店経営の近代化が進められ、販売促進のための機能的な意匠が啓発されていった時代でした。とかく「飾り立てる」ことで「美術化」されてきた明治以来の装飾は、こうして簡素化の方向に向かつていったのです。ただ、町の人々の目は、そう易々と合理化に対応できなかったわけではなかったようです。彼らの間では「桃屋の象」は好評で、いっぽう須賀田の展示は「説明的」すぎると、揶揄する声もあったのでした。

(きむらひとやす 学芸員)

〈図版出典〉麗飾 店頭装飾競技会(新潟市教育会編、一九一七 新潟県立図書館蔵)

図二 桃屋の装飾



的場遺跡の「和同開珎」

えー一枚三〇万、古銭情報紙を見ていたら、「和同開珎」の売値に目がいき、驚き、ちよつと暗い気持ちになりました。

当館常設展示の古代では、鮭漁を行い、これを朝廷に「二八」として進貢するための官衙跡的場遺跡の模型や、その出土物のレプリカ、写真などを展示しています。そこで、和銅銭を二〇枚、差して結び、布で包み、建物の柱の直近下に埋納した形で出土したことが紹介され、地鎮のための埋納と説明しています。

古代銭貨がどのように誕生し、古代社会の中で機能したかは、栄原永遠男さんが『日本古代銭貨流通史の研究』(塙書房一九九三)などで、和銅銀銭と銀の地金がある程度流通していたことを条件にしていたとして

います。同時にその「付編」日本古代銭貨出土一覽表には、奈良市の平城京や西隆寺遺跡、また大津市の伝崇福寺遺跡などに類例があることを掲げていますので間違いないことでしょう。一九八九・九〇年の調査当時

ためであろうと理解すること追われその価値にまで触れる余裕がなかったようです。

ところで最近戴いた竹田和夫編『歴史のなかの金・銀・銅―鉦山文化の所産―』(勉誠出版二〇一三年七月)に池田善文さんの「長登銅山と古代社会」があり、教えられました。

ここには長登銅山は、「昭和六十三年奈良東大寺境内の発掘調査で、奈良の大仏創建時の遺物が出土し、(中略)化学分析で原料銅がこの銅山によることが判明して脚光を浴びました」とあり、私は当時現地説明会が翌日にあるというニュースを聞いて新潟からとんでいったことを思い出しました。

今はさらに進んでその銭貨の原料銅、ないしは鑄造工房が、その長門国長登銅山のものか特定できないかと思つたりします。また同時に銭貨二〇枚がもつ貨幣価値についても、地鎮の意味の理解にもつながる分かりやすい説明をする必要を感じています。

収蔵資料紹介

オオビラ

内面は黒色漆、外面は赤色漆で塗り、蓋には漆絵を描く、蓋の径二五〇mmの大型の椀です。ほぼ同形の資料が二点あり、いずれも赤色漆の地に金泥のような絵具を多用し、一点には菊の漆絵、もう一点は海辺の村と人物、帆走する船の漆絵を描いています。一点に大鉢塗という名称が伝わるほか、用途等は不詳なのですが、大きさや形状から見えていわゆる「オオビラ」と推測し、夏に開催した新潟の漆器展において展示しました。

オオビラは、かつて婚礼や葬儀等の宴席を自宅で催した際に、ノッペイ等と呼ばれる野菜の汁物料理を盛るのに使われました。汁物は持ち帰らずに宴席の場で食すのが決まりで、オオビラに盛り付けて参会客に披露し、勧めたものです。

新潟では江戸時代後期から漆器生産が盛んになりますが、もっぱら膳や重箱の様に板物と呼ばれるものは木地から生産し、椀のような丸物と呼ばれる割りを施す木地はよそで作つたものを取り寄せ塗りを施したといわれています。

大正七(一九一八)年の新潟新聞に古町通七番町の漆器商、仁木茂平にインタビューした「塗物の変遷」と題した記事があります。記事では、先々



代のころは会津から店の前に置ききれないほどの大量の品が輸送され、主に「大平」であったと述べています(十二月二十一日)。さらに、この大平とは「ノッペ」を入れるもので、大平が廃れた後は「鶴足」「大丸」という廣蓋の一種が会津から来たとも述べています(同二十一日)。

現在も漆器産地である会津は、古くから漆器生産が盛んで、新潟町では元禄四(一六九一)年に会津の行商が塗椀の小売を願ひ出した記録があります。近世を通じて新潟町には会津の漆器が集散していたようです。有数の城下町であった会津の優れた様々な職人の技術は、人物両面から新潟に伝えられ、新潟町の漆器の使用・生産に影響を与えたと思われ、詳しい経緯は不明です。このオオビラの製作地も伝わっていませんが、会津と新潟の交流を示す資料となる可能性があり、調査を進めたいと考えています。

(森 行人 学芸員)